

## English Garden 第37話

"We shall live again."  
Nancy Wood

「私たちはまた生きる」  
ナンシー・ウッド

前回に引き続きナンシー・ウッドの詩集 "Spirit Walker" からで、これは詩の表題でもあります。少々長い詩なので、日本語で内容をご紹介します。

長いあいだ彼らは私たちにこう話してきた。  
おまえたちはもう終わりのだ。  
もはや利用する余地はない。  
食い尽くされて おれたちの世界と同じくぐいの人間になったのだと。  
私たちは心から記憶を追い出すように教育され、  
新しい言葉によって昔の歌や物語を忘れるよう仕向けられた。  
自動車やテレビは私たちを新しい世界に連れ出そうとし、  
そこで私たちの恐怖に答えを与えようとした。  
彼らは私たちの古いやり方を笑った。  
私たちの秘密を探り出そうとした。  
ウイスキーを持ってきて私たちの知恵と交換した。  
私たちの土地と川を永遠に保証するといった。  
もし私たちが言うことを聞かならばと。  
ついに彼らはこういったものだ。  
おまえたちはなぜ死なない？  
私たちはいった。  
外見はあんたたちと同じだろうが、  
霊の住む心の奥深くには  
先祖の糸が受け継がれているのだと。  
だから私たちは また生きる。  
生きるのだ  
きつと。

おだやかなものが多い先住民の詩の中にも、このように激しい調子のももあり、苦悩の深さに胸を打たれます。

ナンシー・ウッドの序文によると、タオス族の住むプエブロの西には広大なリオ・グランデ峡谷が目のとどく限り続いており、深い割れ目をえぐってリオ・グランデ川が流れています。かつては自分たちのものだったこの砂漠の景観から、タオスの人びとは伝説を創り出してきたのです。また、こうした山や砂漠や動物や鳥のよって織り成された、豊かで複雑な宗教が人びとを支えているのです。「生命の中に溶け込んでいる『偉大な精霊』(グレイト・スピリット)なしには、何事も成り立たない」ということです。

また彼らは、自然は循環するものとして輪廻転生を信じています。現在の生を終わってもまた生まれ変わると信じているため、死を恐れず、おだやかに受け入れるのです。

このように、もともと深い霊的な資質を持ち、自然と一体になった生活を守ってきた人びとは、どれほど迫害を受けても近代文明の社会に同化することはできなかったのでしょう。占領されてから400年近い今日でも、老人たちは電気や水道を引くことも許さず、白壁で囲った居留地の中で、昔と変わらない宗教的な生活を営んでいます。一步外に出れば政府の役人の住居が建ち並び、乗用車やトラックが走り回る社会があるのですが、でも当然のことながら、若者たちはもう髪を編んだりせず、仕事を求めて村を離れる者が多くなっているそうです。

ブランケットをまとった老人が、ひなたぼっこをしながら遠くの山の峰を見つめてすわっており、時折歌うようなティワ語で子どものときに聞いた物語を話す、というように、ここには昔ながらの生活のリズムと静寂が支配しています。今回の旅行で私たちは残念ながらこのタオスの村まで行けませんでした。この神秘的な村を見ようと、世界じゅうから訪れる客が絶えないということです。

